

---

# 光輝く青空のように

B・R

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

光輝く青空のよつに

### 【NZコード】

N2517D

### 【作者名】

B・R

### 【あらすじ】

「プロローグ」 - あなたは大切な人が亡くなつたらどうしますか  
- 両親を小さい頃に亡くし、性格が変わつてしまつた新堂和也。その全てを知る友人の柳川隆介。昔に戻つて欲しいと切に願う幼馴染の月島凜。いつも元気な笑顔を振りまき、和也を元気づけようとしている秋奈琴音。和也を思い、空回りをする少女達。そんなことは全く気付かず、冷静に判断し、ストレートに言う和也。それをフローする柳川隆介。少女達の思いは、通じることができるのだろうか。和也は過去を顧みず、変われるのだろうか…。

## 第一章 すべての始まり（前書き）

初めて投稿する小説です。

未熟者でありますけど、読んでいただくと幸いです。

基本的に主人公である新堂和也が成長していくところを見ていてほしいです。

お読みになり感想が「ありましたら、お構いなく書いてください。

## 第一章 すべての始まり

今、目の前に広がっている世界は透き通った青。

白い雲が一点も無いほど清々しい空。

地面からは、春が近いのか草が芽を出し始めている。

あの時の空とは全然違う空が田の前にある。

でも、あれがあつたからこそ今の自分がいる。

そして、隣には俺を変えてくれた人であり俺の大切な人がいる。

これから始まるのは、俺の物語。

新堂和也という一人の男が変わっていく物語である…。

繰り返される日常。

毎日、時間通りに登校し、何も書かれていないまっさらな黒板に教師たちが書いていく文字。

それをひたすら書き写していくだけの日々

「また間違えたか…あの教師。一体何回間違えば気が済むんだ。」

文句を言つても怒るだけだからスルーだな。

俺の名前は新堂和也。

自分で言うのはあれだが…大概の事は出来る普通の男子高校生。

過去にちょっとした出来事があるのだが、…そんな気分ではないので言わない。

「先生！…そここの漢字間違えているよーーー！教師がそんな漢字間違えるなんて恥ずかしいーーー！」

「つるせーー柳川！…なら、□□の間に答えてみろーーー！」  
注意を受けたのは柳川隆介やながわ じゅうすけ

俺の古くからの友人であり、小さい頃は、よくバカばっかしていた親友だ。

不真面目の部分があるが、やる時はやる男だ。

「問・織田信長や武田信玄など、有名な戦国武将は大概 　だつた」

これは、またマニアックな問題を出したな。  
しかも、先日歴史系のテレビ番組でやっていたのと同じだから…あの教師見ていたな。

「えーと…先生？その問題の答えは分かるのですけど…この場で言つてもよろしいのですか？」

確かに。

この答えは男子だけだったら平然に言えるのだが、女子もいると言いくといかもしない。

でも、周りは問の答えを知っているかのように笑っている。

隆介は先生に許可を求める質問をしたが、実は返答する気は満々の様子だ。

「答えはホモですーーー！」

平然に言えるのは隆介の良いところなのかもしない。

言つた瞬間、教室内は静まりかえったのは言つまでもない。

その授業で今日の学生の仕事は終わった。

「和也、一緒に帰る?」

隆介は、さつき答えた問題について全く気にしていない感じだ。

「そうだな…帰るとするか」

俺たちは、教室を出て、下駄箱から靴を取り出し、履き替えた。少し歩くと正門の前に、女子がちょこんと立っていた。

「あつ…やつと来た」

この女子は、隆介と同じく俺の古くからの友人の月島凜つきしまりんである。月島とは、近くなので小さい頃よく遊んだ仲だ。

「もう学校から出て、帰つちやつたと思つたよ」

「それはねえよ。だつて、俺達はゆつくりと教室を出たんだぜ」

「そうだ。待つていると予想したから…」

「それでもね…心配しちゃうだもん」

会話を聞くよつこ、月島は心配性で自分のことより他人を優先してしまつのだ。

「それじゃ帰る?」と隆介が言つた瞬間、俺は何かが来る気配を感じた

「和也せんぱい！！待つてください！！」

大きな声を発し、走つてくるのは中学からの後輩であり友人の秋奈

琴音は、天真爛漫でいつも元気な女の子で俺自身、琴音の元気さに助けられたこともある。

「琴音か…どうした?」

「どうしたもんかってもあつまちゃんよーー! 琴音を忘れないでくださいよーー! 」

「あつ！？その顔は忘れた顔だ。先輩ひどいよ…」

「申し訳ない!」

「罰として、奢つてくださいね」

「それじゃ、俺達にも奢つても、おつかな」

「…ちょっと待て。何でそれで奢らなければならないのだ？」

「後輩でも、人を忘れるのは十分に罪ですよ。先輩。」

「 そ う だ ぞ 和 也 。 さ す が の 俺 で も そ れ は …… 」

「え、と……隆介君。以前、私のことを忘れ……」

月島が何か言おうとしたが、隆介に口を押さえられてしまった。

「……ん? 何か言おうとしていたけど……」

「何でもない！何でもない！ それじゃ行こうぜーーー。」

結局、月島が言おうとしたことは分からず……みんなに奢ることになってしまった。

俺は奢った為金欠になりコーヒーだけの昼食になってしまった。

明日から、どうやって過ごしていくんだ……。

コーヒーを飲みながら、窓からいつもと見上げる空を俺は無意識に見ていた。

## 第一章 少女たちの心模様（前書き）

第1章から随分と日にち経ってしまいました…大変申し訳ありません。  
ん。

それでは、第2章の開幕です。

## 第一章 少女たちの心模様

空を見ながら「コーヒー」を飲んでいたら…

「「」の後、どつかに遊びに行かねえ？」  
と隆介が話を切り出し…

「みんなで遊べるのがいいな」と琴音が言つた。

だが、俺は話が盛り上がる前に

「お金がないから断る」

しかし、円島が「私が出してあげる」

これは円島の良いところでもあり悪いところである。  
琴音は「折角だから遊びにいこうよ～」と行く気満々だ。  
「みんなそういうのだから行こうぜ」と隆介は言つた…

「円島に負担かけるのは可哀想だ。お前達だけで行つてくれ  
俺は拒否の姿勢は崩さない。

俺が行つたとしても、お遊びがつまらなくなつてしまつだらつ。

しかし…

「4人なので2人組みペアだ。で、どつする?」

結局来てしまつた…。

あれからボーリングに行くことになり  
それでも、俺は断り続けてたら

月島は泣き出すついで琴音は嘆きだすので、断りにくくなってしまった。

この時、女の子が流す涙はどれだけの攻撃力があるのだろう…。  
俺が「分かった。行くことにする」と言つたら、急に泣き止んで笑

みがほころんだ。

俺と一緒に遊んで、どこが楽しいのか。

ジャンケンでペア決めすることになり、結果は…

和也&琴音ペア

隆介&月島ペア

俺とペアとなつた琴音は、ルンルン気分で喜んでいる感じ。

一方、隆介とペアになつた凜は顔には出していないが…

雰囲気が『ゾクッ』とするようなものが出している…感じがする。

ゲームが開始するが、一投目俺は見事なガーター…

琴音の場合、女の子なのでガーター防止の壁があつたおかげでガーターは避けられた。

隆介は、最初に5本倒したけど、2投目でガーターへ…。

月島は燃えているのか…闘争心丸出し。

普段はゆつたりとした雰囲気をかもしだしているのに  
この時は、闘争心丸出しでボーリングをしていた。  
いつもは見せない月島の豹変に俺は驚嘆した。

ゲーム結果は、隆介&月島ペアが勝利。

俺は、最初にガーテーに出したのが悪かったのか…

調子が全く上がりなくて、琴音の足を引っ張ってしまった。

琴音には「申し訳ない」と謝った。

「いいですよ～。誰にだつて調子が悪い時ありますよ」と琴音はフ

オローしてくれたが

とても情けない気持ちになり、俺は今すぐにこの場から立ち去りたくなつた。

「……それじゃ、俺帰る」と言つ

「「えつ！？」と円島と琴音から聞こえた気がしたが、気にせず

帰つた。

「先輩帰つちやこましたね。やつぱり足を引っ張つたのがショック  
だつたのかな」

「和也くんは、責任を人一倍感じやすいから…」

……

場が静まり返つた。

「なあ…凛ちゃんに琴音ちゃん…」と隆介が2人に訊ねた。

「2人とも、和也のことが好きなんだろ?」と唐突に聞いた。

「凛ちゃんは昔からそうだつたし…琴音ちゃんは、和也に対しての  
態度を見てたら分かつたから」

隆介の発言は止まらない。

「いつまで2人ともイジイジしているんだ？」

「そんなこと分かつているわよ…私は小さい頃まで明るかつた和也くんに戻つて欲しい…その頃の和也くんが好き。今の性格の和也くんも好き。」

に対して琴音は…

「あたしも先輩が好き。一緒に過ごして元気づけていたいの。あたしが先輩の天使になりたい。」

「2人が和也に対しての気持ちは分かつた。だけど、和也は鈍感だから積極的にアプローチをしなきゃいけないぜ。2人とも。」

「「そんなこと分かつているわ（よ）…」」

「はいはい。それじゃ、おいらは帰るよ」

「あたし月島先輩に負けないから…。」

「私も琴音ちゃんに負けない…。せつつたい和也くんの心を射止めさせてみせるわ…！」

今日、この日から凜と琴音の勝負が始まる…。

## 第三章 変わり始めた世界（前書き）

新年明けましておめでとうございます。

昨年の暮れから書き始めた新年まで延びてしましました。

それでは、第三章の開幕です！

## 第二章 変わり始めた世界

「……うん？ もう、朝か？」

窓から朝の眩しい日差しが差し込んできた。

また、いつもの日常が始まると思うとやつていられない。

それでも、俺は学校に行き続ける。

あいつらがいれば、単なる日常が面白く感じられるはずだから。

いつもの通学路歩いていると…

「あ…和也くんおはよう」

いきなり月島が路地から現れて驚いた。

「月島…。なぜここにいるんだ？」  
しかも、なぜいきなり出でてくるのだ？

「えつ？え…。と…いつも一人で登校しているよね？一人だと寂しいと思うから今日から一緒に登校しようと思つて…」

確かに…俺は、いつも一人で登校している。

その事で俺は寂しいとか悲しい気持ちにはならない。

両親が死んで…ほぼ一人で生きてきたからそういう気持ちにならな  
い。

でも、まあ一人で登校するよりもいいよな。

「俺は別に構わない。あとは、月島の判断だ」

そういうと付いて来たから一緒に登校することになった。

月島は俺に対して話してかけてきているが、朝の俺は貧血気味。

だから頭が上手く回らないから返答が安易になるが、丹島は気にしているようだ。

学校に着くと隆介が教室にいた。  
いや、言葉に語弊があつた。  
いたといつより机に突っ伏して寝ている。

学校に来て寝ているのか。  
眠くなる気持ちは分かるが…やはつこには起こすべきだひう。  
俺は隆介の脳天にチョップを喰らわそうとしたひ…

がばッ！！

いきなり起きた…。

「ふああああああ～…あ、おはよう。今日は一人で登校してきたのか？」

「あ…ああ。 そ…だ…が…そ…れ…が…ど…う…し…た…？」

「此間、言つたことを早速実行か…いつひひひひひ

「実行…？ 一体何を実行？」

「おこりじゅねえよ。」

「じゃ……誰が……？」

「ああ……誰だろ? ね～…」

隆介は薄気味笑いをしながら、誰かとは教えてくれなかつた。薄気味笑いしている時、月島が赤くなつていたが、なぜ……？  
単なる日常でもいつもの日常ではない。また違う日常が起き始めているだろうか……。

午前の下らない授業が終わりお昼になつた。

いつもの俺は何も食べない……稀に100円で済ます事がある。だが、今日は何も食べない。

そう決めて、何も考えずにボーッと空を見よつとしたら……

「和也くん？」

月島が話しかけてきて

「もしかして今日の昼はん食べないの？」

「ああ……食べなくとも大丈夫だから。」

「でも、それは体に良くないよ。……だから私持つて来たよ

「……持つてきた? ……何を?」

「お弁当……だよ」

円島は俺なんか為に弁当を持つてきてくれたそ�だ。  
それは、嬉しいことだが迷惑はかかっていのううか?  
それを言おうとしたが…

「私は、好きで作つてきたから迷惑はかかっていのうよ」と言われてしまつた。付き合いが長いから分かるのか。

だけど、俺は食べるわけにはいかない。  
でも、食べないと…いや…しかし…そ�だ!

「おーい。隆介。」

俺は売店で買つてきてパンをモグモグ食べている隆介を呼んだ。

「何だ?」

「うーんあるの弁当食べていいぞ。」

「えつ?…いいのか?」

「ああ。いいぞ。」

「それではありがたくいただきます…。」

「あ?…つ…」

「どうした?円島?」

「ううん。何でもないよ…。」

円島は何か言おうとしたら隆介が食べ始めた時に口ずさんでしまつ

た。

隆介が食べ始めた後、月島が隆介を鋭い目付きで見ていた。

食べ終わった後、月島が隆介を教室の外に呼び出して出て行つた。昼休みの終了チャイムが鳴る寸前に2人とも帰つてきたが、隆介は恐ろしいものでも見たのだろうか…顔色が優れない。一方の月島は、何もなかつたのような平然とした顔つきだった。隆介に一体何があつたのか…あまり考えたくない…。

午後の授業も「光陰矢の如し」ように過ぎ去つていた。放課後になり、帰ろうとしたら…

「バンツー！」

「せんぱーいーーー一緒に帰りましょーーーー！」

後輩の琴音が勢いよくドアを開けた為「ミシッ！」と音がしたが…触れないでおこう。

「琴音…。もつと静かに教室のドアを開けて入つて來い。」

と言つがあの琴音だ。言つても無駄だと思った。

実は、昔に…いや言いたくない。機会があればいつか話そう。

「そんなこと気にしていたらハゲてしましますよ？」

「俺はそんなに年をとつていない。それに勝手にハゲると言つたな。」

「そんな冗談をおいといて…一緒に帰りましょーーー！」

「冗談なのか？これは言葉の暴力ではないのか？

まあ、俺にはこの後用事はないし琴音が一緒に帰らうとしているから

「分かつた。帰らう。」

実は了承した理由は、もう一つある…。琴音は断ると駄々をこねるからだ。

そのような行為を教室内でやられると……。

風が吹く。

時を進めよつとして吹くのか。それとも勇気を出す風もあるのか。

俺の傍らには琴音がいる。

教室では元気だったのに沈黙してしている。

それにどつも様子がおかしい…。

「琴音…。どうかかしたのか？さつきから何かおかしいぞ」と尋ねた。

「…………。」

琴音は何も発しない…聞こえていないのだろうか。いや、俺が琴音の声が聞こえないのだろうか。

「…先輩。」

「何だ。琴音。」

「先輩つて…」

「……。」

「先輩には…好きな女の子は…いますか…？」

それからどれだけ時が進んだらうか…

俺が感じるには長く感じたが、時の感じ方は人それぞれ。時が進まないで、俺はすぐに答えていたと思う

「いない。」

「どうしてですか？」

琴音の顔はいつも明るい笑顔ではなく、真剣な目と顔つきだった。

「理由が必要か？」

「何があるのでしたら、無理には答えなくとも…」

「理由はある。だから言いたくないから言わない。」

「分かりました…。」

聞きたいのだろうか。顔が悔やんでいそうな表情だ。でも、「あの事」は自分でも言いたくない。

その後は、琴音は何も言わず、途中の道で別れた。自分の家までは一人の帰路になつた。

「ふう…」

俺は手に持っていた通学用鞄をベッドに放り投げ俺も飛び込んだ。

「好きな女の子…。」

琴音が言つたのが頭から離れない。

「ヴィイー…ヴィイー…ヴィイー…」

携帯のバイブレーター音が鳴つた。

そういうえば、マナーモードのままだつたな…。  
電話で隆介からだ。

「ペッ…！… もしもし？俺だ」

「よひ、和也。ひとその前にひきなりオレオレ詐欺みたいなことか  
ひきつたなよ」

「それじや何と言えばいいのだ。」

「おひ。真に受けんなよーそんなことせびりでもいいんだよ

「何だ。それで用件は？」

「お前ひひど…女の子を好きになつたことがあるか？」

「ドクンシ…！」

隆介が言つたことに俺は動搖してしまつた。

「こや！ないが…」

上ずつた声を出しつてしまい、隆介に感ずられてしまつた。

「うん？今、上ずつた声が聞こえたが……まあいいや。」

“どうやら大丈夫のようだ。

「俺から言つのもあれなんだが、少しは凛ちゃんと琴音ちゃんのことを考えてあげろよ」

隆介は一体何を言つているのだ。円島と琴音について考へる？

「なぜ円島と琴音についてなんだ？」

「やつぱり…お前つて奴は………！」

なんだ？怒つてこいるのか？怒らせそつな」とは言つていないと思つ

が…

「…まあ、本人が気づいていないのは仕方ない  
なんか納得している感じだ。

「じゃ、ストレートに言つからな。凛ちゃんと琴音ちゃんは…」  
円島と琴音は…

「お前…つまり新堂和也が2人とも好きなんだよ  
…はあ…？」

「いいか！？2人ともお前のことが好きなんだ…！…それを考へろ…！」

「…えつ…えつ…」

「それをどうするかはお前次第だ。それじゃあな。」

「プー…プー…プー…」

電話は一方的に切られた。

2人が俺のことが好きということは初めて知った。

俺はその気持ちに応えられることが出来るのか…。

無理だ。俺はそういうことは考えられないのだ。

親父とお袋が死んでから、俺は誰も不幸させではないと決めたからだ。

俺は真っ暗な空みたいに明るくない。

でも、逆にその気持ちに応えてあげないのは彼女達の不幸に入るのだろうか…。

分からぬ…。どの選択が良いのだろうか…。

いや…どの選択も俺が導き出す答えに逃げているのではないだろうか。

俺は、考え続けていたら急に意識が途絶え始め…眠りの世界へ…入つていった。

## 第三章 変わり始めた世界（後書き）

どうでしたか？何かありましたらお願ひします。

次話を書こうとしているですが…私の都合が合わなくて中々書く時間が取れません。

出来れば1月の間に投稿しようと思つています。

1月中には投稿が出来ませんでした。

現在第4章の製作に取り掛かっています。

完成予定は私の努力次第です。

もう少しお待ちいただきます。

お楽しみ方々には大変申し訳ございません。

## 第四章 心の波紋（前編）（前書き）

お待たせしました。

最後の話から2ヶ月経ちましたけど次話投稿です。  
と言つても前編です（汗

それでは、前編のお話を…どうぞ…。

## 第四章 心の波紋（前編）

俺が導き出す答えの先に何があるのだろうか？

考えていたら頭がおかしくなってきた。

いつかは真剣に考えなくてはいけない事だが……考えるのをよやう。

俺は、あの出来事から心に決めた事がある。

「誰も悲しませたくない」

だから、今出した答えが最良と考えられない。  
時間をかけて、少しずつ判断していくことにしよう。

……  
……  
……

「ピッシュピュー・ピッシュピュー・ピッシュピュー・」

新たな一日を始めさせる電子音が脳内に響く。

「カチッ」

「…眠い」

一体いつまで起きていたのだろうか？

いや、何回寝て起きるのを繰り返したのだろうか？

2度寝は気持ちいいが…何度もやると眠気が増す気がする。

今日は、土曜日だ。

次の日が休みだから昨日言われたことを考えていたのだろう。とりあえず、起きなければならない。

1階の居間に行き、冷蔵庫から牛乳を取り出しコップに注ぎ…前もつて買っておいたパンと一緒に食べる。

「冷蔵庫の中ほとんど無かつたな…」

冷蔵庫の中は食材と呼べる食材が無かつた。

「仕方ない…午後から買いに行くか…」

昼は食べなくてもいいが…さすがに朝と夜は食べないとな。

「午後になるまで報道ニュース番組とか見るか…。」

ボーッとテレビを見ながら時間を過ごしてゆく。

あつという間に昼になり、テレビからはお昼を知らせる映像が流れた。

「さて… そろそろ買いに行くか…」

昼ごはんは要らないから夕飯分と数日分の食料だけだな。

「ピンポーン」

来訪者を知らせるチャイムが響いた。

「一体誰が来たんだ?」

俺は玄関に行き、ドア越しからスコープで人物を見た。

「月島!? なぜ? いや近所だから何かの連絡か?」  
そう考えている間に

「和也くん? 私です。月島凜です。」

俺は、とりあえずドアを開いた。

「こんにちは。和也くん。」

「…ああ。こんにちは。で、何か用?」

「えつ? ! いや…その…」

予想をしていなかつた言葉に、惑つていてるのか?

それに、手には野菜やらがビニール袋から飛び出していたのが見え  
た。

「手に持つている物は何だ?」

「あつー? これ!? 実は»飯を作りに来たんだ。」

昔…いや数年前に月島が俺の家に来て»飯を作りつとした事があつ  
た。

その時は、甘えさせてもらい作つてもらつたが…

それから毎日来るようになつてしまい、これ以上は月島に迷惑をか

けられないと判断し

俺は月島を家に入れるのを止め、「飯を作りに来るのを拒んだ。  
しばらくの間、月島は諦めずに来ていたが、いつかは忘れたが来なくなつた。

家に来るのはそれ以来か…。

「…以前にも言つたが、それは拒んだはずだ。」

「うん…。でも、心配になつたから…。」

「他人の心配するより自分のほうが優先じゃないだろ?」

「それは、そうだけ?」

「理解しているはず。もつ、俺は昔の俺ではないことを…。」

「……」

「それじゃ…。」

俺はドアを引き、俺の視界から月島は見えなくなつた。  
月島は何も言わずに帰つたと思つ…だが…。

それから2時間、ぐらりと経ち、そろそろ食料を買いに行かなければな  
くなつた。

「さて、そろそろ行くか…。」

身支度は、既に終わっているから財布と鍵を持ち家を出るだけ。ドアノブに手をかけ、ドアを開こうとしたら

「ツー？ 開かない？」

玄関のドアは押す扉だから引くことで開いたり、スライドする扉ではない。

ましてやシャッターみたいな扉でもない。

どういう状況か分からなくなつた。

状況確認の為、靴を持って1階の縁側から出ることにした。

俺の目の前には信じられない状況が起きていた。ドアを開くのを邪魔したのは、月島だった…。

「…………。」

俺は驚くというより厭されたのだった。

ドアに寄りかかり蹲つて寝ていた。

「とにかく起こさなければ…」

体を揺すつてみたらすぐに起き

「はつ！？ 私…寝ていた？」

全く、人の玄関先で寝るなんてどういう考えしているやら…  
と言いたかったが、そこまで言つたら泣くかもしれないから伏せておこう。

「ああ。寝ていた。」

顔には泣いた跡みたいなものがあり、田も潤んでいた感じもした。

「一体、どういうつもりだ。俺は帰れと言つたはずだ」

蹲り寝ていた理由を問詰めるように事を無意識に言つていた。

「…………。」

月島は何も言わなかつた。

日も暮れ始めたのか、気温が低くなり冷えてきた。  
もし、このまま玄関先に蹲り、夜もずっといたら風邪をひいてしま  
うかもしない。

今の月島ならやりかねない事だな……。

「はあ～…とりあえず家中に入れ。」

この俺が妥協するなんて…どうしたんだ?

一方の月島は素直に家へ入つていつた。

「ホットミルクと「コーヒー」どうがいい?」

「ミルクで…」

俺は、月島をリビングの椅子に座らせて

冷えた体を暖める為にミルクをレンジで温めていた。  
ちなみに俺は「コーヒー」を作つていた。しかもレンジで…。

「ほら、ミルクだ」

「ありがとう。」

俺は月島がミルクを飲んで落ち着かせてから  
話を聞くのが最良だと判断した。問題はそれからだ。

俺は月島が飲み終わるまで、コーヒーの波紋の中に映りだされる自分を見ていた。

## 第四章 心の波紋（前編）（後書き）

どうでしたでしょうか？

いきなりですが、

この先の話を書いた紙が紛失したので  
設計図が真っ白状態になっています。」

でも、幸いに暫定プランがケータイに残っていたので  
それを基にして新しく書いていきます。

それでは、後編で会いましょう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2517d/>

---

光輝く青空のように

2010年10月15日22時57分発行